【論　文】

エミリ・ディキンスン――瞬と永遠の詩学

佐藤 江里子

序

エミリ・ディキンスンが詩を書き始めた頃の作品「世界の栄光はこのように過ぎ去る」（“Sic transit gloria mundi” Fr2/J3）の第１連で、詩人は次のようにうたう。

Sic transit gloria mundi
“How doth the busy bee”
Dum vivamus vivamus
I stay mine enemy !—

Oh veni vidi vici !
Oh caput cap-a-pie !
And oh “memento mori”
When I am far from thee（Fr2/J3）

世界の栄光はこのように過ぎ去る
「忙しいミツバチさん、ごきげんよう」
生きているあいだは精一杯生きよう
私は自分の敵を阻止する！

本学現代教養学部助教

あぁ、来た、見た、勝った！
あぁ、頭のてっぺんから爪先まで！
あぁ、「汝は死を意識せよ」
私があなたから遠くにいるときは

19 世紀アメリカを代表する詩人であるディキンスンの作品が評価されたのは、20 世紀になってからであり、生前は家族やごく一部の友人たちを除いて彼女が詩を書いていることを知る人はほとんどいなかった。「世界の栄光はこのように過ぎ去る」（“Sic transit gloria mundi” Fr2/J3）は、1852 年、彼女が 21 歳か 22 歳の時に書かれた。この頃すでにディキンスンは、一年間在籍したマウント・ホリヨーク女子神学校を退学したあと、生家である父の家屋敷で、病弱な母親に代わって家事をしながら本格的に詩を書いていた。

同年 2 月 20 日には、1850 年に書かれ、*The Poems of Emily Dickinson*[1] の 1 番目に収められているヴァレンタインの詩「目覚めよ！ 9 人の詩神（ミューズ）たち、私に神聖なうたをうたってください／神聖な糸をほどいて、私のヴァレンタインに結んでください」（“Awake ye muses nine, sing me a strain divine, / unwind the solemn twine, and tie my Valentine!” Fr1/J1）が、『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』紙に掲載されている[2]。匿名での掲載とは言え、すでに詩人になることを決意していたディキンスンにとって、これは彼女の人生の中で大きな出来事だったと言える。さらにこの詩は、ディキンスンの全詩集の序章にふさわしく、彼女の作品のテーマがキーワードとして散りばめられている。

and seize the one thou lovest, nor care for *space*, or *time!*
Then bear her to the greenwood, and build for her a bower,
and give her what she asketh, jewel, or bird, or flower;
and bring the fife, and trumpet, and beat opon the drum—
and bid the world Goodmorrow, and go to glory home! (Fr1/J1, 36-40)

あなたが愛するものをとらえなさい、空間も時間も気にせずに！
それから彼女を緑の森に連れて行き、彼女のために隠れ家を建て
彼女が求めるものすべてを与えなさい、宝石、小鳥、あるいは花を
横笛、そしてラッパを持ってきて、太鼓を鳴らしなさい―
世界におはようと言い、栄光の家へと行きなさい！

36 行目から最終行 40 行目における、「宝石、小鳥、あるいは花」（“jewel, or bird, or flower”）は、ディキンスンの詩や手紙の中で自己を表象する重要なメタファーである。

同時代の詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman, 1819–92）が、『草の葉』（*Leaves of Grass*, 1855）の「私自身のうた」（‘Song of Myself’）の冒頭で、「私は私自身を祝う、そしてうたう」と詩人としての決意を高らかにうたっているのと同様に、ディキンスンは愛のうたであるヴァレンタインの詩の中で、時空を超えて「愛するものをとらえなさい」と彼女独自の「私自身のうた」をうたう。また、「彼女を緑の森に連れて行き、彼女のために隠れ家を建て／彼女が求めるものすべてを与えなさい」は、ヘンリー・ディビッド・ソロー（Henry David Thoreau, 1817–62）の『ウォールデン』（*Walden*, 1854）を思わせる。ディキンスンは、詩人を育てたニューイングランの土壌に、ラルフ・ウォルド・エマスン（Ralph Waldo Emerson, 1803–82）の思想を体現したホイットマンやソローと共通するアメリカの精神性という種を意識的、あるいは無意識的に内包している。

そして、「世界の栄光はこのように過ぎ去る」ものであるから、「私があなた（死）から遠くにいるとき」、「汝は死を意識せよ」と言う。つまり「栄光」を極め、「生」の只中にいるときこそ、人間は「死」を意識しなければならないということを詩人は主張している。ディキンスンの作品のテーマは多岐にわたるが、その中でも「死」をテーマにしたものは 1789 編の作品の約 3 分の 1 にも及ぶ。17 世紀のカルヴァニズムに基づくピューリタニズムの宗教的伝統が根強く残るニューイングランドの精神風土は、彼女の作品や

人生に「死」の影を落とす。さらに彼女が生涯を通じて最も多く作品を残した時期は南北戦争とも一致する。そして、元来、病弱なディキンスンが患う眼の病気は、彼女に身体的不安を与え、それは現実的な死の恐怖へと発展する。このような時代背景や彼女自身の環境の中で、本稿は特にピューリタニズムの伝統や彼女自身の信仰の問題など宗教的観点から、限りある存在、死すべき運命のもの（mortal）として、不滅（immortality）・永遠（eternity）を求め続けたエミリ・ディキンスンの「一瞬」と「永遠」の詩学について論じる。

1．メメント・モリ

エミリ・ディキンスンが生まれ、その生涯のほとんどを過ごしたニューイングラン地方、マサチューセッツ州アマストは、宗教的理想を掲げ、メイフラワー号で新大陸に上陸したピルグリムファーザーズの流れをくむ、伝統的な町である。エミリの祖父、サミュエル・ファウラー・ディキンスンは、アマスト大学の設立者のひとりであり、父エドワード・ディキンスンも同大学の財務理事を務めた。裕福で恵まれた環境の中、ディキンスンは 1840 年にアマスト・アカデミーに入学するが、1840 年代になると度々信仰復興運動が起こる。1847 年、アマスト・アカデミー卒業後に進学したマウント・ホリヨーク女子神学校でも、信仰への圧力があり、生涯信仰告白をしなかったディキンスンは、ひとり反抗し続けた異端者だった。

ディキンスンの時代の信仰復興運動にも、18 世紀のジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards, 1703–58）の信条が受け継がれている。1741 年、エドワーズは『怒れる神の御手の中にある罪人』（‘Sinners in the Hands of an Angry God’）の中で次のように述べている。

> The God that holds you over the pit of hell, much as one holds a spider, or some loathsome insect, over the fire, abhors you, and is dreadfully provoked: his wrath towards you burns like fire; he looks

upon you as worthy of nothing else, but to be cast into the fire; he is of purer eyes than to bear to have you on his sight; you are ten thousand times more abominable in his eyes than the most hateful and venomous serpent is in ours. You have offended him infinitely more than ever a stubborn rebel did his prince: and yet it is nothing but his hand that holds you from falling into the fire every moment[3].

地獄の上であなたをつかむ神は、人間が一匹の蜘蛛をつかむように、炎の上にある忌まわしい昆虫をつかむように、あなたを忌み嫌う、そしてひどく立腹している：あなたに対する神の怒りは、炎のように燃えている。神はあなたたちを他に何の価値もないものとみなす。でも炎へと投げ込まれるべきものだ。神はあまりにも純粋な目をしているので、あなたを見ることができない。あなたは何度も神の目の中で忌まわしい。最も不愉快で悪意に満ちたヘビがあなたの目の中で忌まわしい以上に。頑強な反逆者が神の王子にした以上に、あなたは大いに神を怒らせた。だが、まさに神の御手こそが、今にも炎の中へと落ちることからあなたをつかんでいる。

エドワーズは、人間を地獄の業火の上に落とされる一匹の蜘蛛にたとえ、神の怒りから救われるには、神を信じ、信仰の道を進むしかないことを説く。これは、18 世紀以降も、信仰復興運動の指導者たちに用いられ、長い間人々に多大な影響を与え続けてきた。

近代化が進んでゆく 19 世紀においても、大覚醒運動（Great Awakening）が起き、エドワーズが説く「神の怒り」と「地獄」への恐怖は、信仰告白をすることができないディキンスンを苦しめる。

When I am most happy there is a sting in every enjoyment. I find no rose without a thorn. (L10, 31 January 1846)

私がとても幸せな時、どんな楽しいことにも針があります。バラには必ずトゲがあるものです。（アバイア・ルートへの手紙、L10, 1846 年 1 月 31 日）

アマスト・アカデミー時代のディキンスンが、友人のアバイア・ルートに宛てた手紙の中で、信仰の問題について言及している。信仰の苦悩はどんなときも、「針」（“sting”）や「トゲ」（“thorn”）のようにディキンスンの「魂」を突き刺す。信仰告白をしてキリスト教徒になることが最善であると理解しているが、どうしても決断することができない。同じように信仰の問題で悩み、信仰告白をしたであろう友人に「おそらくあなたは、今回よりもずっと前に心を決めていたのでしょう。おそらくあなたは、時という束の間の喜びを、不滅という王冠と交換したのでしょう。おそらく天上で光り輝く仲間たちが、もう一人の救われた罪人の歌に合わせて、その黄金のハープを奏でてくれたのでしょう。」（“Probably you have made your decision long before this time. Perhaps you have exchanged the fleeting pleasures of time for a crown of immortality. Perhaps the shining company above have tuned their golden harps to the song of one more redeemed sinner,” L10）と述べている。

ここでディキンスンは、教義が説く捨てるべき現世を「時という束の間の喜び」（“the fleeting pleasures of time”）、そしてキリスト教徒になることで神に選ばれ、祝福され、約束された天国における「永遠」を「不滅という王冠」（“a crown of immortality”）と表現している。信仰告白をした「もう一人の救われた罪人」（“one more redeemed sinner”）である友人アバイアがうたう歌に、「天上で光り輝く仲間たち（天使）」（“the shining company above”）はハープを奏で祝福してくれる。このイメージとは反対に、キリスト教徒になれない自分に対して深い罪悪感を抱くディキンスンは、「私は毎日生きていて、ますます罪を犯していると感じます。惜しみなく私に与えられた慈悲が差し出されているのに、心を閉ざしているからです。」（“I feel

that every day I live I sin more and more in closing my heart to the offers of mercy which are presented to me freely," L10）と苦悩する。ディキンスンは、「死」と「永遠」ついて次のように続けている。

> Does not Eternity appear dreadful to you. I often get thinking of it and it seems so dark to me that I almost wish there was no Eternity. To think that we must forever live and never cease to be. It seems as if Death which all so dread because I launche us upon an unknown world would be a relief to so endless a state of existense. I dont know why it is but it does not seem to me that I shall ever cease to live on earth—I cannot imagine with the farthest stretch of my imagination my own death scene—It does not seem to me that I shall ever close my eyes in death. (L10)

> あなたには、永遠は恐ろしいと思えませんか。私はよくそのことを考えるようになっています。それは私にはとても暗いように思え、もう少しで永遠なんてなければいいのにと思うところでした。私たちは永遠に生きなければならなくて、存在することを決してやめてはいけないと考えると。私たちを未知の世界に送り出すという理由で、みんながとても恐れている死が、このように終わりのない存在状態には、まるでひとつの救いであるように思えます。なぜなのか私にはわかりませんが、私がいつかこの世で生きるのをやめることになっているとは思えないのです。―最大限の想像力をはたらかせても、私自身の臨終の場面を想像することなどできません。―私がいつか死ぬときに目を閉じることになっているなんて思えないのです。

教義を信じることができず、信仰告白に迷い、死後のヴィジョンがあいまいなディキンスンには、「永遠」は「終わりのない存在状態」（“so endless a

state of existence”）であり、人々が恐れる「死」はむしろ救いであると言う。教義が説く「永遠」は本当に素晴らしく、「現世」を放棄するほど価値があるものなのか、教会に対して懐疑的なディキンスンは、「反対側」から「斜めに」真理を導こうとする。このL10の手紙は、アマスト・アカデミー時代、まだ十代のディキンスンによって書かれたものであるが、この頃から生涯にわたり、「死」と「永遠」はディキンスンの人生と切り離せない大きなテーマとして作品の根底にある。

1．死の瞬間のヴィジョン

苦悩しながらも信仰告白をすることができない自分が、死の瞬間に見えるものは一体何なのか、詩人はそのヴィジョンをとらえようとする。

I heard a Fly buzz—when I died—
The Stillness in the Room
Was like the Stillness in the Air—
Between the Heaves of Storm—

The Eyes around- had wrung them dry—
And Breaths were gathering firm
For the last Onset—when the King
Be witnessed—in the Room—

I willed my Keepsakes—Signed away
What portion of me be
Assignable—and then it was
There interposed a Fly—

With Blue—uncertain—stumbling Buzz—

Between the light—and me—
And then the Windows failed—and then
I could not see to see—（Fr591/J465）

一匹のハエがブーンとうなるのを聞いた―私が死ぬときに―
部屋の静寂は
嵐のうねりのあいだにある―
大気の静寂だった―

周囲の人たちは涙も枯れ果ててしまった
どんどん息がつまってゆく
王がこの部屋で目撃されるはずの
あの最後の襲来にそなえて

私は署名をして、財産を手放し、形見を残した
それぞれの相続分が
割り当てられたそのとき
一匹のハエが割り込んできた

陰鬱で不確かでよろめくような羽音で
光と私のあいだに
窓は消えて
私は見ようとしても見ることができなかった

L10の手紙で「私自身の臨終の場面を想像することなどできません。―私がいつか死ぬときに目を閉じることになっているなんて思えないのです。」と述べたディキンスンは、この詩の中で、「私」に死の瞬間を経験させ、その時何が見えるかを描く。今まさに息をひきとろうとする「私」、それを見

守る生者たち。その生者たちは、形見分けしたことからも家族や親しい友人であることがわかる。ディキンスンは、「彼女が生きた最後の夜（“The last Night She lived” Fr1100/J1100）のように、死にゆく人と残される人、死者と生者の視点の相違による絶望、緊張感における死の瞬間を描こうとする。死の瞬間のヴィジョンは、ディキンスンにとって最も関心があるテーマのひとつと言える。しかし、どんなにその死の瞬間まで同行しても、詩人は死の瞬間のヴィジョンを死者と共有することはできない。ここでは、一匹のハエが象徴的に死者と生者を分断し、途切れた死の瞬間のヴィジョンは「私は見ようとしても見ることができなかった」（“I could not see to see”）で表現される。そして、認識できるものは、低くうなるハエの音だけである。視覚は失われ、聴覚のみとなる。ディキンスンは、最後に残る機能として、聴覚的なイメージで死の瞬間を描く。「成功はもっとも美しく思われる」（“Success is counted sweetest” Fr112/J67）においても、「打ち負かされた彼のようには—いまわの際—／死にゆく者の禁じられた耳には／遠くに響く勝利の歌が／苦悩に満ちて、はっきりと炸裂する！」（“As he defeated—dying— / On whose forbidden ear / The distant strains of triumph / Burst agonized and clear!”）のように、聴覚的な描写で詩を閉じている。

芸術の伝統として、「ハエ」は死を連想させるが、ディキンスンは、「最も小さいハエの勅許状」（“the Charter of the least Fly” Fr537/J570）や「まるで主婦がハエを追い払うように」（“As Housewives do, a Fly” Fr356/J511）などのように、「家」や「主婦」など日常と結びついたイメージで、「ハエ」を使う。Fr591 では、「私」の「部屋」の「大気の静寂」を破り、「陰鬱で不確かでよろめくような羽音で／光と私のあいだに」「割り込んできた」「一匹のハエ」は、日常に潜んでいる死を象徴する。陰鬱な羽音とともに死者の部屋に出現した瞬間、ハエは日常から、非日常を象徴するものへと移行する。そして死にゆく「私」と見守る「生者」たちが息を殺して待っていた「最後の襲来」（“the last Onset”）は、期待していた「神の顕現」（epiphany）とは程遠い、「陰鬱で不確かでよろめくような羽音 」（“Blue—uncertain—

stumbling Buzz”）のみである。死の瞬間のヴィジョンの崩壊、そしてこの突然の断絶は、死の向こう側にある「永遠」や「天国」さえも、曖昧で不確かなものとし、ディキンスンにとって「絶望」を意味する。

Fr591 で出現が待たれた「王」（“the King”）は、「私が死のために止まることができなかったので」（“Because I could not stop for Death—” Fr 479/ J712）に登場する「死」のイメージにつながる[4]。「彼」（“He”）に擬人化された「死」（“Death”）が「私」を迎えに来てくれて、「不滅」（“Immortality”）と共に馬車に乗る。それは、「私」が日常の風景を通り過ぎ、墓のような場所に到着するまでの「死」と「不滅」と「私」の馬車の旅である。

Fr479 の最終連では、「それから―何世紀も経った―だが／短く感じる／馬の頭が永遠に向かっていたと／おそらく最初に感じたあの一日よりも―」（“Since then—’tis Centuries—and yet / Feels shorter than the Day / I first surmised the Horses’ Heads / Were toward Eternity—”）と言い、詩を閉じている。「死」と「不滅」と「私」が短い馬車の旅をしている（ように見える）が、これが「一瞬」なのか「永遠」なのか、読者には判断することができない。馬車の窓から見える風景もまた、見慣れた日常のようであるが、何か違和感がある。「死」が「私」のために止まってくれた時、すでに「私」が死んでいるとしたら、この風景は死者の目線から現世を見ていることになる。また、すでに現世ではなく「死」の向こう側にいるのであれば、この風景は現世と非常に似ている別世界となる。やがてたどり着いた場所は現世の墓を思わせる。そこで、途切れた意識は、「私」が語る＜今＞へと戻る。「永遠に向かって」旅立とうとしていた「あの一日よりも」「何世紀も経った」＜今＞の方が短い。意識の中では、過去の経験を回想しているようだ。回想を具現化した形が、「死」と「不滅」と「私」の馬車の旅となる。時間の跳躍や繰り返しを暗示しているこの世界において、日常的な時間の流れを超越する時間の概念が構築されている。だが、やはりここでも Fr591 の「死の瞬間」のヴィジョンと同様に、墓のような場所に到着したところで、ヴィジョンは途切れ、「死」の向こうにあるはずの、「私」がたどり着き

たい場所、見たい景色を見ることができないまま終わっている。

3. 一瞬と永遠

ディキンスンは、「死」がひとつの通過点となり、「永遠」を認識できるかどうか、詩の中で「死」を経験する。次の詩は、「私の人生」の中で、つまり生きているあいだに、経験した「死」についてうたう。

My life closed twice before it's close;
It yet remains to see
If immortality unveil
A third event to me,

So huge, so helpless to conceive
As these that twice befell.
Parting is all we know of heaven,
And all we need of hell. (Fr1773/J1732)

私の人生は終わる前に二度終わった
まだ確かめることが残っている
不滅が第三の出来事を
私に見せてくれるかどうか

想像するにはあまりにも巨大であまりにも無力で
二度起きた出来事と同じくらいに
別れは私たちが天国について知っているすべて
そして地獄について必要なすべて

「私の人生は終わる前に二度終わった」(“My life closed twice before it's

close”）という衝撃的な一行で、この詩は始まる。「終わる前に二度終わった」ということは、死ぬ前、つまり生きているあいだに二度、死に匹敵するほどの「出来事」が起きたと考えられる。この「出来事」を実際にディキンスンに起きたことへの言及と解釈し、それが具体的に何を指すのか、伝記的な事実からいろいろと推測されてきた。しかし、ここでは事実の追求による「出来事」の内容ではなく、「私の人生は終わる前に二度終わった」とディキンスンが言う経験が、第三連の「別れ」（“Parting”）によって引き起こされたことに注目する。それは、経験によって定義することができる「天国」と「地獄」の両方を知る鍵となる。また、この「別れ」は「死」のメタファーであり、これまで論じてきたように「別れ」である「死」を通過点として、その向こうにあるものは、愛するものたちと再会できる「天国」か、それとも二度と会えない「地獄」なのか、今度は経験では定義することができない、「第三の出来事」（“A third event”）を確かめなければならない。しかし、「不滅」が見せてくれる「第三の出来事」は、「二度起きた出来事と同じくらいに」「想像するにはあまりにも巨大であまりにも無力で」ある。

「別れ」が引き起こす絶望や苦悩の深さは愛の大きさに比例する。愛するものとの別れ、それは地獄の苦しみとなる。たとえ生きて別れたとしても、二度と会えなければ、永遠の別れを意味する。「もしあなたが秋に来てくれるなら」（“If you were coming in the Fall,” Fr356/J511）では、愛する「あなた」に会いたい思いをうたう。現在の事実と反対の仮定を表す仮定法過去が使われていることから、「あなたが秋に来てくれる」ことも「私が一年以内にあなたに会う」ことも実際にはないことがわかる。会いに来ることはない「あなた」が、「秋」に来てくれるなら、「夏」などなくていいのだ。ディキンスンは自然の生命力が溢れ出すアマストの短い夏をとても愛していた。そんなディキンスンが「まるで主婦がハエを追い払うように」「私は夏を払いのける」と言う。さらに「ほんの数世紀遅れるだけなら」会えるまでの月日を「私は自分の手で数える」と宣言する。「ほんの数世紀」（“only Centuries”）や数えきれないほどの年月を、指を折って「自分の手で数え

る」などは、ディキンスン特有のパラドックス（逆説）であり、「エリュシオン（極楽浄土）は一番近い部屋と／同じくらい遠い」（“Elysium is as far as to / The very nearest Room” Fr1590/J1760）などにも見られる。さらに、Fr356 の第 4 連と最終連では、次のようにうたう。

If certain, when this life was out—
That your's and mine, should be—
I'd toss it yonder, like a Rind,
And take Eternity—

But, now, uncertain of the length
Of this, that is between,
It goads me, like the Goblin Bee—
That will not state—It's sting.（Fr356/J511）

この世が終わったとき—
もしあなたと私の生命が確かに存在しているのなら—
果物の皮のようにこの世なんて向こうに放り投げ
そして永遠をとるでしょう—

でも、今、あいだにある
この不確かな長さが
私を苦しめるのです　鬼蜂のように—
何にも言わずに—針で突き刺すのです

「この世が終わったとき」「あなたと私の生命が確かに存在している」という表現は、Fr1773 の「不滅」が「私」に見せてくれる「第三の出来事」の言い換えである。「永遠」を確証できないその「不確かな長さ」（“uncertain

of the length”）は、距離と時間の両方を意味する。「この世が終わったとき」つまり、「死」という「別れ」（“Parting”）のあと、「永遠」までの距離的、時間的な「長さ」がわからないことが「私」を苦しめる。そして、苦悩を象徴する「鬼蜂」（“the Goblin Bee”）の「針」（“sting”）は、アバイア・ルートへのL10の手紙にある、ディキンスンの魂を突き刺す「針」（“sting”）や「トゲ」（“thorn”）と一致する。

どうすれば「永遠」を手に入れることができるのだろうか。教会に行き、祈りを捧げれば、神に保証してもらえるのだろうか。「この世界は終わりではない」（This World is not conclusion. Fr373/J501）の最後4行、「説教壇では大げさな身ぶり／力強いハレルヤが鳴り響く／麻酔薬でも鎮めることができない／魂を少しずつかじる歯を」（“Much Gesture, from the Pulpit—/ Strong Hallelujahs, roll—/ Narcotics cannot still the Tooth / That nibbles at the soul—”）で断言しているように、教会に通い、説教を聴き、「ハレルヤ」をうたい、神の祝福を受けたと思うことは、ディキンスンにとっては、「麻酔薬」（“Narcotics”）にすぎない。彼女は、「魂を少しずつかじる歯」（“the Tooth / That nibbles at the soul”）、あるいは魂を突き刺す「針」（“sting”）や「トゲ」（“thorn”）による痛みを、「麻酔」で「鎮める」のではなく、痛みを痛みとして受け止める。

教義が説く死後の「生命」を確信できないなら、天国での再会も保証されないだろう。だが、たとえ「不滅」が「私」に「第三の出来事」を見せてくれなくても、生きているあいだに経験する「別れ」の苦悩と絶望、「私を苦しめる」再会までの「不確かな長さ」を克服するためにできることは、「今」この時が二度と戻れない一瞬であることを意識して生きることに他ならない。

This is the place they hoped before,
Where I am hoping now
The seed of disappointment grew

80

Within a capsule gay
Too distant to arrest the feet
That walk this plank of balm,
Before them lies escapeless sea
The way is closed they came. (Fr1284/J1264)

これは前に彼らが望んでいた場所
今、私が望んでいる場所
失望の種が
陽気な嚢(ふくろ)の中で育った
あまりにも遠くて香油の板の上を
歩く足をとらえることができない
その前には逃れられない海がある
歩いてきた道のりは閉ざされている

「前に彼らが望んでいた場所」そして「今、私が望んでいる場所」、それは「生者」の視点から見た「死」を通り越した「永遠」である。眼前に続く「逃れられない海」(“escapeless sea”)は未来、背後にある「歩いてきた道のり」(“the way”)は過去を象徴する。そのあいだに「今」があり、決して過去に戻ることはできない。ここでは人生を「歩いてきた道のり」で表現しているが、時の不可逆性がテーマとなる。なぜなら、「死、それは白い偉業—/一度でも達成すると/かつて伝達できた力を無効にする—」(“It is the White Exploit— / Once to achieve, annuls the power / Once to communicate— Fr938/J922”)で定義しているように、死は一度、達成すると二度と伝達できない「白い偉業」(“the White Exploit”)なのである[5]。「香油の板の上を/歩く足をとらえることができない」ように、止まることがない時の流れの中で「今」をとらえることはできない。だが、ディキンスンは、確かに存在する「今」をとらえようとする。

結

「死」は、「永遠」、つまり天国へ通過点なのか、それとも終わりなのか。ディキンスンは、Fr2 にあるように「汝は死を意識せよ」（“memento mori”）と自己に問いかけ、詩の中で何度も「死」を経験し、「死」を定義する。そして、自己に忠実であることが、神に忠実であるとし、信仰心が深いがゆえに、大多数に倣い信仰告白をすることができなかったことは、ディキンスンの人生において最大のパラドックス（逆説）である。「永遠」までの「不確かな長さ」が、より一層ディキンスンの意識を「死」に向かわせ、彼女は教会ではなく自分自身の中に、神の声を聞き、「永遠」を見つける。

「永遠」は、自分の外にあるのではなく、自分の内にある。「私が死のために止まることができなかったので」（“Because I could not stop for Death” Fr 479/J712）の「死」と同様、「彼」（“He”）に擬人化された「永遠」は、まるで肉体のない「魂」だけの友人のように私と一緒に散歩して、共に暮らす。

The Blunder is in estimate
Eternity is there
We say as of a Station
Meanwhile he is so near

He joins me in my Ramble
Divides abode with me
No Friend have I that so persists
As this Eternity（Fr1690/J1684）

大きな間違いは判断の中にある。
永遠はそこにあると

駅のことのように私たちは言う—
そのあいだ永遠はすぐ近くにいて

永遠は私と一緒に散歩して—
私と共に暮らす—
この永遠ほど私のそばにいる友人はほかにいない

心から愛する存在に出会ったとき、その愛するものと永遠に一緒にいることを願う。人間には不可避の「死」があり、死すべき存在であることは否定できない。死の向こうに「永遠」が見えないなら、「別れ」(“Parting”) は地獄となる。途切れた「死の瞬間のヴィジョン」やたどり着けない「永遠」、「死」は天国への通過点ではなく、終わりを意味するとしたら、人間の一生はほんの一瞬であるという認識が生まれ、限りある「生」としてとらえる。ディキンスンは常に「死」を強く意識し、「死」を含めたものが「生」であると認識する。この限りある存在、死すべき運命のもの (mortal) としての認識があるからこそ、キリスト教の教義ではなく自分自身の「生」の「一瞬」に、不滅 (immortality)・永遠 (eternity) を求め続けた。ディキンスンは「それぞれの瞬間には天国がある／いかなる地獄もない」(“They have a heaven each instant / Not any hell.” Fr1764/J1746)、そして、「永遠は今という瞬間でできている」(“Forever—is composed of Nows” Fr690/J624) と言う。永遠は死の向こう側にあるのではなく、死を含めた生、つまり限りある生における愛に基づく瞬間の中にある。これこそが、ディキンスンの「一瞬」と「永遠」の詩学なのである。

注

本稿におけるディキンスンの詩は、*The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. 3 vols. Ed. Franklin, R. W., Cambridge, MA: Harvard UP, 1998. からの引用とし、Fr と略す。Fr のあとの数字は詩の番号を表す。J のあとの数字は Jonson 版 (*The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. Ed. Johnson, Thomas H., Cambridge,

Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 1955.）の詩の番号を表す。また、手紙は *The Letter of Emily Dickinson*. 3 vols. Eds. Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard UP, 1958. からの引用とし、L と略す。L のあとの数字は手紙の番号を表す。
本稿における詩と手紙の和訳はすべて筆者による。

[1] ジョンスン版、フランクリン版共に 1 番の詩としてディキンスン全詩集に収蔵。
[2] 『スプリングフィールド・リパブリカン』紙の編集長のサミュエル・ボウルズは、ディキンスン家とは家族ぐるみの友人である。ディキンスンが残した受取人不明の「マスター・レターズ」のマスターの候補者として名前があがっている。
[3] *The Works of Jonathan Edwards, Vol 2: With a memoir by Sereno E. Dwight revised and corrected by Edward Hickman*: 'Sinners in the Hands of an Angry God.' The Banner of Truth Trust, 1974, p. 8.
[4] 「エミリィ・ディキンスン―白い偉業」『英米文学語学研究会論集（The EAS REVIEW）』第 18 号（英米文学語学研究会）pp.15-18
[5] *ibid*., pp. 18–19

文献リスト

テキスト

Dickinson, Emily. *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Ed. Johnson, Thomas H. Cambridge, MA: Harvard UP, 1955.

Dickinson, Emily. *The Letter of Emily Dickinson*. 3 vols. Eds. Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard UP, 1958.

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. 3 vols. Ed. Franklin, R. W. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.

参考文献

Eberwein, Jane Donahue. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport, Connecticut, London: Greenwood Press, 1998.

Edwards, Jonathan. *The Works of Jonathan Edwards: With a memoir by Sereno E. Dwight, revised and corrected by Edward Hickman*. 2 vols. Eds. Dwight, Sereno E. and Hickman, Edward. The Banner of Truth Trust, 1974.

Farr, Judith. *The passion of Emily Dickinson*. Cambridge: Harvard UP, 1992.

Habegger, Alfred. *My Wars Are laid Away in Books The Life of Emily Dickinson*.

Random House, New York, 2001.

Johnson, Thomas H.. Emily Dickinson: *An Interpretive Biography*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1963.

Emily Dickinson—The Poetics of the Moment and Eternity

Eriko SATO

ABSTRACT

Born in New England (Amherst, Massachusetts), Dickinson wrote 1,789 poems at her father's homestead in Amherst without being widely recognized as a poet during her lifetime; nevertheless, she became rightly appreciated after her death. The themes of Dickinson's poetry range widely over nature, God, faith, love, life and death, immortality, eternity, and others. Especially she focuses on the theme of death which ranges one-third of all the 1789 poems she left.

I analyze her poems and letters with careful consideration to her background in the religious tradition of Puritanism based on Calvinism that had existed in New England since the 17th century. It casts a shadow of "death" on her work and life.

Dickinson, who never made a confession of faith in her lifetime, expresses her very complex feelings about faith and her uncertain love for God in her works. A religious revival was flourishing again in Amherst around 1846. However, Dickinson could not be convinced of the "perfect peace and happiness" that awaited her in her "savior" in an orthodox Christian context. As a result, she decided to stay at home and to place her faith instead in her own personal God, with all her heart.

Although such a religious attitude is regarded as a deviation from orthodoxy, she tried to find answers to her questions in places aside from church and the Bible and to ascertain what was true in her writing. Eventually, Dickinson found that her confession of faith consisted in capturing the moment of epiphany in her engagement with writing poems.

Dickinson is always strongly aware of "Death" and recognizes that "Life" includes "Death," that is, "Death" is a part of "Life." It is the poetics of "the moment and eternity" by Emily Dickinson who transcended "Death" and continued to seek immortality and eternity in the moment of her own "Life" rather than the Christian doctrine.